

## 展覧会趣旨

きらきらと耀く並河七宝は、明治の代に「並河靖之七宝工場」と「店」を営んだ並河靖之（1845・弘化2年～1927・昭和2年）と職工たちにより、この地で創り出されました。靖之は1845（弘化2）年京都に生まれ、生家は近江栗太郡六地蔵梅野木の高岡家といい、武州川越城主松平大和守家臣の武家で、父・九郎左衛門は川越藩京都留守居役を勤めていました。1855（安政2）年に靖之は、数11歳で縁戚の並河家の養子に入り、青蓮院門跡坊官を務める家柄のため、天台座主・青蓮院宮入道尊融親王（後の久邇宮朝彦親王）に仕えました。しかし、時代は幕末維新の激動期にあたり、主人が被る境遇に自身も翻弄され、先行きへの不安が絶えずあり、靖之は朝彦親王に仕える傍ら、満を持して、当時、京都でも新産業として注目された七宝業に飛び込みました。

日本の七宝業の系譜は近世初期に遡り、江戸時代には幕府お抱えの七宝師・平田道仁を祖とする一族によって技法が相伝されてきました。そのため、幕末の尾張藩で梶常吉が独学で技法を開発し、尾張七宝の産地が隆盛すると、早くも海外輸出を果たすなど、近代七宝の胎動が始まりました。近代七宝業は明治維新後の京都でも産業としての将来性が期待され、東京、神奈川、山梨、埼玉など、各地で関心が高まり、着手された新興産業でした。靖之も1873（明治6）年から七宝を手掛け、1878（明治11）年に専業とし、実業の世界で紆余曲折を経ながら、やがて自身の七宝業を究めて、日本の七宝を世界に冠たるものとなりました。

有線七宝技法を特徴とする並河七宝は、金属の器胎を素地とし、図柄の輪郭線（アウトライン）を金属線で模り、ガラス質の多彩な七宝釉薬で色を挿す工程を経るため、金属線と釉薬の色と、独創的な容が相まって、妙なる光彩を放ち、見る人の心に美しい光を満ちわたらせます。19世紀の万国博覧会を通じて、靖之が創始した並河七宝をはじめ日本の近代七宝は、高い技術力により世界を驚かせ、外国人たちは日本の文化や歴史に対する評価と理解を一新する存在となり、多くの人々を日本へ、京都へと誘いました。そして、今日、日本文化は、古典や現代アート、アニメやゲームも含め世界中の人々を魅了していますが、工芸もその一つで、並河七宝をはじめとする明治の工芸は日本を代表するものとなりました。

この度の展覧会では、ひとりでも多くの皆様に並河七宝の存在をお伝えいたしたく、「並河七宝の光彩—色と容の玉手箱」をテーマに開催しました。近代七宝の研究は途上にあり、並河七宝や明治の七宝業の多くには未だに分からないことも多くありますが、並河家に遺され、当館に受継がれた様々な資料を紐解きながら、並河七宝の魅力をご紹介します。落ち着いた世情ですが、皆様には当館にて、心穏やかに観照のひと時をお過ごしください。

並河靖之七宝記念館